

# 「気になる保護者」に関する保育者の意識と支援 Awareness and support for nursery teachers pertaining to “parents of concern”

金山 美和子

## 要旨

保育者が「気になる保護者」とはどのような特徴をもっているのか、保育者は「気になる保護者」をどのように支援しているのかを明らかにすることを目的として、質問紙調査を実施した。その結果、「気になる保護者」の特徴としては、「こちらの意図が伝わりにくい」「子どもとのかかわりが不器用である」「行事予定や提出物などを把握していない」など、「保育者及び園とのかかわりにおける特徴」と「子どもとのかかわりにおける特徴」の項目において「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が比較的高く、「保護者自身の特徴」の項目においては全般的に低かった。保護者に対しては「普段からコミュニケーションを心がける」「保護者の話をよく聞く」「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」といった支援を行っていることが示された。

キーワード：気になる保護者、子育て、家庭支援、保育者

## I. 問題と目的

1994年策定のエンゼルプラン以降、保育所は子育て支援の拠点的な役割を期待されている。1999年10月29日に改訂された保育所保育指針には第13章という新たな1章が設けられ、保育所における子育て支援のあり方や、それに対応する職員の研修等の重要性が具体的に記された<sup>1)</sup>。同年に策定された新エンゼルプランにおいても、必要なときに利用できる多様な保育サービスの整備や、在宅の乳幼児も含めた地域の子育て支援の充実が図られるようになった。2008年に告示された保育所保育指針には、第1章総則において保育所の役割として「(3) 保育所は、入所する子どもを保育するとともに、家庭や地域の様々な社会資源との連携を図りながら、入所する子どもの保護者に対する支援及び、地域の子育て家庭に対する支援を行う役割を担うものである。」と記されている<sup>2)</sup>。総則に示すことにより、保育所に求められている「子どもを健やかに育てること」と、「子どもの保護者とその家庭を支援すること」の2つの役割がさらに明確化されたのである。加えて第6章保護者に対する支援では、1 保育所における保護者に対する支援の基本、2 保育所に入所している子どもの保護者に対する支援、3 地域における子育て支援として詳細に記されている<sup>3)</sup>。保育所に入所している子どもの保護者に対する支援については、保護者との相互理解を図ること、仕事と子育て

の両立への支援、子どもに障害や発達上の課題が見られる場合、育児不安が見られる場合、不適切な養育等が疑われる場合などの取り組みと留意点等が示されている。

また、幼稚園においても、1998年12月に告示された幼稚園教育要領に「幼稚園の運営に当たっては、子育ての支援のために地域の人々に施設や機能を開放して、幼児教育に関する相談に応じるなど、地域の幼児教育のセンターとしての役割を果たすよう努めること。」と、子育て支援機能の役割が示された<sup>4)</sup>。2008年の幼稚園教育要領改訂においては、第1章総則の第3に「幼稚園の目的の達成に資するため、幼児の生活全体が豊かなものとなるよう家庭や地域における幼児期の教育の支援に努めること」と明記されている<sup>5)</sup>。

このように、保育者にとって、保護者と家庭を支えることは子どもの育ちを支えることと同様に重要な役割となった。渡辺(2009)は、子ども家庭福祉という観点に立てば、子どもだけを見るのではなく、家族全体を視野に入れて、家庭生活に関与する人々や組織による支援を総合的に捉えることが必要となると述べている<sup>6)</sup>。

このような流れのなかで、特別な配慮を必要とする子の家庭などへの保護者支援も保育者の課題となっている。鑑ら(2005)は、保育士を対象とした事例検討会にて示された対応困難事例27ケースについて考察し、「保育所には、従来の保育技術のみならず、地域の子育て家庭も対象とし相談援助機能が

求められるようになったが、現実には『気になる子ども』『気になる親』を前にして、どう対応しているたらよいか悩んでいる保育士は少なくない」と指摘している<sup>7)</sup>。白石 (2014) は保育所において、臨床発達心理士を含むチーム支援で子どもの発達支援と保護者支援を行った事例研究から、「保護者の家庭環境が複雑化する中、園には子どもが示す発達特性を理解する難しさを感じる保護者、多岐にわたる家庭の課題を抱えた保護者、子どもの育ちに『不安感』や『困り感』がある保護者がおり、園への期待が大きくなる一方、その対応に保育者は苦慮し、余裕をなくしていた」と述べている<sup>8)</sup>。これらの研究からは、気になる子どもの支援に伴う保護者支援において保育者が対応に苦慮する実態が報告されている。子どもの育ちを支えるためにも、保護者への支援は重要であり、保育者がいかに保護者を支えるかを検討する必要があると考える。

久保山ら (2009) は、幼稚園や保育所の保育者が「気になる子ども」という言葉を使うのは、子どもが乳幼児であるため、障害かもしれないが診断がついていない場合や、子どもが示す気になる行動が障害によるものか、環境のためなのかがわかりにくい場合が多く、当然「気になる」という言葉で表現される内容は保育者によって異なる<sup>9)</sup>ことを指摘し、保育者にとって「気になる子ども」「気になる保護者」とはどのようなものかを幼稚園教諭・保育士を対象にアンケート調査を行った。「気になる保護者とはどのような保護者か」を自由記述で回答を求めたところ、回答が多かったのは「しつけ・関わりに関すること」(13%)、「子どもに無関心」(12%)、「伝わらない」(11%)の順であった<sup>10)</sup>。林ら (2010) が行った、幼稚園・保育所の園長 73 名に対する調査では、気になる保護者がいるとの回答は 60% で、気になる保護者の内容としては生活習慣の問題、経済的・時間的余裕のなさ、子育てへの自信のなさ、精神面の問題など保護者自身の課題もあった<sup>11)</sup>。木曾 (2014) は、保育士 607 名を対象とした調査により発達障害の傾向がある子どもの保育に困難を感じている保育士は 80.7%、その保護者支援に困難を感じている保育士は 65.7%であったと報告している。保護者支援の困難の内訳として、「保護者が子どもの様子を理解していないと感じる」や、「保護者に子どもの様子をいつどのように伝えたらよいか悩む」については 7 割程度の保育士が「よくある」または「ときどきある」と回答している<sup>12)</sup>。渡辺ら (2014) は、発達障害児に対する「気になる段階」からの支援について、就学前施設の保育者を対象に

調査を行った。児童発達支援事業を除く保育所・幼稚園・認定こども園 16 施設を分析対象としたところ、発達障害児の保護者への支援における課題として、保護者に対して「障害の特性、支援方針を合理的に説明することが難しい」「保護者と意見が食い違う場合の対処が難しい」が最も多く、半数以上の施設がこれらの困難を経験している<sup>13)</sup>。

このように保護者支援に関する研究は、その多くが、気になる子どもや発達障害の傾向がある子ども、発達障害児への支援に関する研究の一環として報告されており、保護者自身の特性や抱える問題に気づき、いかに支援するかの検討はまだ十分には行われていない。

そこで、本研究は、保育者が「気になる保護者」とはどのような特徴をもっているのか、保育者は「気になる保護者」をどのように支援しているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、A 市の公立保育所、幼稚園に勤務する保育者を対象とした質問紙調査を実施し、保育者にとって「気になる保護者」の特徴と、保護者への具体的支援の実態を明らかにするものである。

## II. 方法

### 1. 調査方法

質問紙調査による。なおこの調査は特別な配慮を必要とする子どもや家庭への支援に関する総合的な調査の一部として実施された。

### 2. 調査対象

A 市の公立保育所 31 か所、公立幼稚園 2 園に勤務する保育者を対象とした。その際、雇用形態は問わず、加配保育士も含めた保育者すべてに回答を依頼した。なお公立幼稚園 2 園の対象者数のごくわずかであること、公立保育所と同一のカリキュラムで保育がおこなわれていることから、本調査においては調査対象を一括して保育者とし、施設ごとの分析はおこなわないものとする。

### 3. 調査時期

2014 年 8 月上旬～8 月中旬

### 4. 調査項目

本稿で結果を示す項目は以下の 5 項目である。①基本属性、②保育歴の属性、③気になる保護者の有無に関する項目、④気になる保護者の特徴に関する項目、⑤気になる保護者に対する支援に関する項目である。④、⑤の項目は、それぞれ久保山ら (2009)、林ら (2010)、木曾 (2014)、渡辺ら (2014) の先行研究、星野 (2011)<sup>14)</sup>、司馬 (2013)<sup>15)</sup> の文献を参考

にしながら作成した。作成した項目は調査実施前に、保育所勤務の保育士、発達相談担当者、子育て相談担当者に提示し、本項目の内容が妥当かどうか、項目が保育者に理解し得る適切な表現であるかという観点から意見を求めた。得られた意見をふまえ項目を修正し採用した。

### 5. 回収状況

調査票配布数：410

回収票数：336（回収率 82.0%）

有効回答票数：314

### 6. 倫理的配慮

調査の実施にあたり、対象者に調査の目的、任意参加、無記名方式による匿名性の保障、結果の取り扱いについて文書で説明を行った。調査票への回答をもって調査への同意を得たものとみなした。

## Ⅲ. 調査結果

### 1. 回答者の属性

性別は女性 93.9%、男性 6.1%、年齢は 29 歳以下が 30.0%、30～39 歳が 28.4%、40～49 歳が 21.3%、50～59 歳が 19.7%、60 歳以上が 0.0%、無回答が 0.6%であった。保育歴は 1～2 年が 6.7%、3～5 年が 17.5%、6～9 年が 17.8%、10～19 年が 39.2%、20～29 年が 12.4%、30 年以上が 5.1%、無回答が 1.3%であった。役職は園長 5.5%、主任 5.8%、クラス担任 65.0%、副担任 3.1%、加配 13.2%、その他 7.1%、無回答が 0.3%で、その他の内訳で主なものは一時保育であった。

### 2. 気になる保護者の有無

現在気になる保護者がいるかについて保育者にたずねたところ、「いる」の回答は 77.7%、「いない」は 22.3%であった。気になる保護者がいると回答した保育者が高い比率にのぼることがわかった。

### 3. 気になる保護者の特徴

気になる保護者の特徴 26 項目について 5 件法で回答されたものを図 3 に示した。26 項目は、「保育者及び園とのかかわりにおける特徴」7 項目、「子どもとのかかわりにおける特徴」7 項目、「保護者自身の特徴」12 項目に分類される。なお本調査でいうところの園は保育所と幼稚園を示すものである。

#### (1) 保育者及び園とのかかわりにおける特徴

気になる保護者の特徴として「とてもあてはまる」「あてはまる」と回答した比率が高かったのは、「1. こちらの意図が伝わりにくい」で、「とてもあてはまる」「あてはまる」を合わせて 60.6%、「3. 行事予定や提出物などを把握していない」が 53.5%

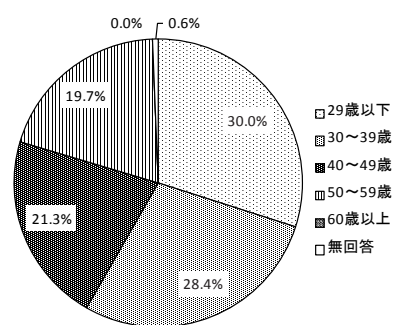


図 1 回答者年齢

注. 回答者数は 314 である

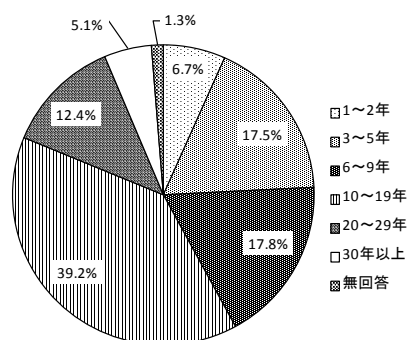


図 2 回答者保育歴

注. 回答者数は 314 である

であった。「6. おたよりや連絡帳を読んでいない」が 44.4%、「17. 園や他の保護者への苦情が多い」は 31.6%であるが、「19. 保護者の集団の中で孤立している」が 27.7%、「20. 保育料、雑費などの未納がある」が 27.1%、「23. 他の保護者とトラブルを起こす」は 21.7%と低い比率であった。この、「23. 他の保護者とトラブルを起こす」は「あてはまらない」「まったくあてはまらない」を合わせた「あてはまらない」が 51.9%で 26 項目中最も高い値となっている。

#### (2) 子どもとのかかわりにおける特徴

「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が高かったのは、「2. 子どもとのかかわりが不器用である」が 58.9%、「4. 子どもの身なりや持ち物に気を使わない」が 47.1%、「5. 子どもを怒鳴ったり激しく叱ったりする」が 44.9%、「8. 気になる子どもを育てている」が 43.3%、「9. 子育てに対する不安が強い」が 43.0%、「10. 子どもに対して関心がない」が 39.8%、「11. 子どもを叩くなど不適切な扱いをする」が 35.6%であった。

#### (3) 保護者自身の特徴

「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が

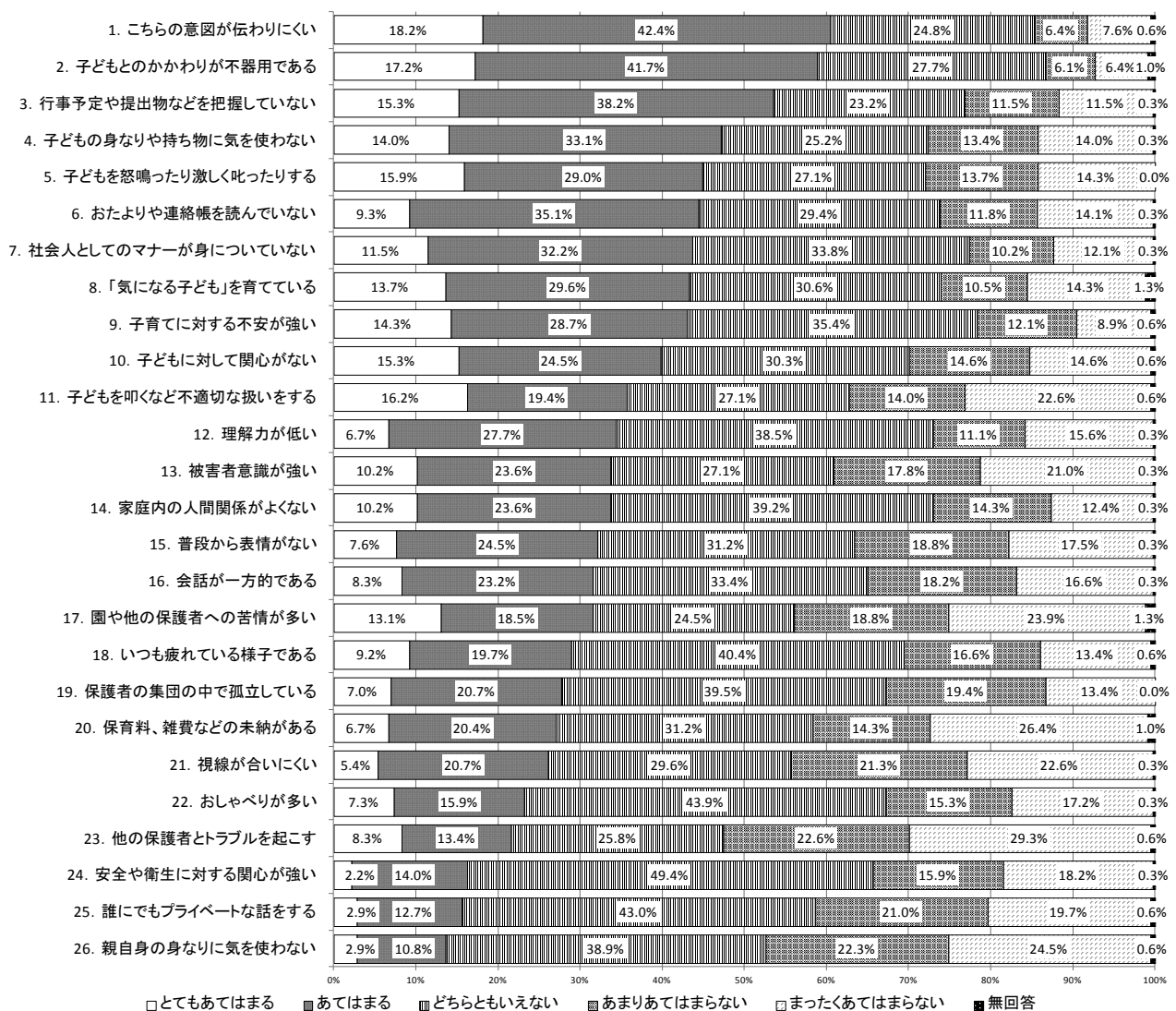


図3 「気になる保護者」の特徴

注. 回答者数は314である

最も高かったのは、「7. 社会人としてのマナーが身につけていない」が43.7%であり半数にも満たない値であった。次いで「12. 理解力が低い」34.4%、「13. 被害者意識が強い」と「14. 家庭内の人間関係がよくない」が33.8%、「15. 普段から表情がない」が32.1%、「16. 会話が一方的である」が31.5%であった。「18. いつも疲れている様子である」が28.9%、「21. 視線が合いにくい」が26.1%、「22. おしゃべりが多い」が23.2%、「24. 安全や衛生に対する関心が強い」が16.2%、「25. 誰にでもプライベートな話をする」が15.6%、「26. 親自身の身なりに気を使わない」が13.7%とこれらの項目はいずれも低い比率となっている。「26. 親自身の身なりに気を使わない」は「あてはまらない」「まったくあてはまらない」を合わせた「あてはまらない」が46.8%となっている。

#### (4) 自由記述回答による特徴

表1に示したとおり、60件の自由記述回答のうち最も多かったのは、「親としての自覚がない、マナーが悪い」で14件であった。主な内訳としては、「子どもと同じような姿の保護者が多い」「送迎の際もスマートフォンを常に操作している」「忘れ物が多い」等である。次いで「コミュニケーションがとりにくい」11件、「過保護・過干渉」10件、「子どもや子育てに無関心」8件、「子育てに自信がない」6件、「しつけ、教育の仕方がわからない」3件、「園に保育を頼りがち」3件、「仕事との両立で余裕がない」2件、「子どもを風呂に入れないなど不衛生である」2件、「子どもとのコミュニケーション不足である」1件であった。

表1 自由記述回答による特徴

親としての自覚がない、マナーが悪い	14
コミュニケーションがとりにくい	11
過保護・過干渉	10
子どもや子育てに無関心	8
子育てに自信がない	6
しつけ、教育の仕方がわからない	3
園に保育を頼りがち	3
仕事との両立で余裕がない	2
子どもを風呂に入れないなど不衛生である	2
子どもとのコミュニケーション不足	1

注. 回答件数は60である

#### 4. 気になる保護者に対する支援

##### (1) 気になる保護者に対し行っている支援

気になる保護者に対しどのような支援を行っているか選択肢を設け該当するものを複数回答可能な形式で質問したものを図4に示した。

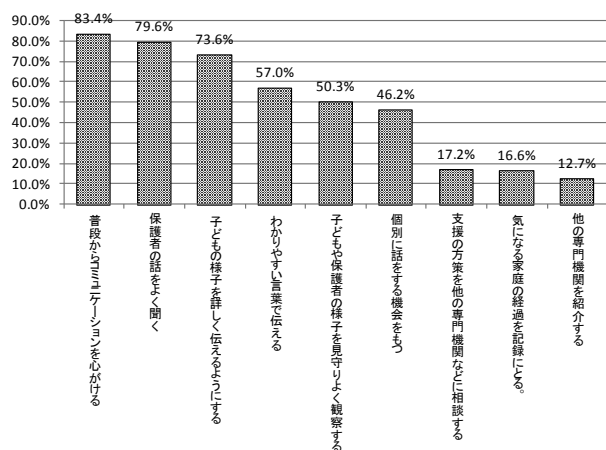


図4 気になる保護者に対する支援

注. 回答者数は314である

「普段からコミュニケーションを心がける」が最も高く83.4%であった。次いで「保護者の話をよく聞く」が79.6%、「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」が73.6%と70%を超えている。「わかりやすい言葉で伝える」が57.0%、「子どもや保護者の様子を見守りよく観察する」が50.3%、「個別に話をする機会をもつ」が46.2%とほぼ半数近い保育者が行っていると回答している。しかし、「支援の方策を他の専門機関などに相談する」は17.2%、「気になる家庭の経過を記録にとる」は16.6%、「他の専門機関を紹介する」は12.7%とこれらの3項目は低い比率にとどまっている。

##### (2) 自由記述回答から明らかになった支援

表2のように、17件の自由記述回答のうち、「親を肯定的にとらえ接する、親のよいところを認める」が6件、「連絡ノート等の使用」が4件などで

あった。その他の内訳は「個別対応を丁寧にする」「全てを大切にしつつ必要であれば保護者のほうにも視覚支援をする」であった。同様に「連絡ノート等の使用」の内訳として「会話で伝わりにくい保護者へは連絡帳に書いて伝える」という支援を行っているとの回答もみられた。

表2 自由記述回答による支援

親を肯定的にとらえ認める	6
連絡ノート等の使用	4
その他	3
直接伝える	2
他(人、機関)へ相談	2

注. 回答件数は17である

##### (3) 行っている支援の保育歴による差異

保育者の保育歴を10年未満と10年以上に分け、気になる保護者に対し行っている支援について該当の有無の回答数を比較した。 $\chi^2$ 乗検定の結果、「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」の項目において該当するとの回答が、保育歴10年以上の保育者に比べ10年未満の保育者に多く有意差( $p < .01$ )があった。また、「個別に話をする機会をもつ」「支援の方策を他の専門機関などに相談する」の項目において該当するとの回答は、保育歴10年以上の保育者に多く有意差( $p < .01$ )があった。「気になる家庭の経過を記録にとる」の項目において該当するとの回答は、保育歴10年以上の保育者に多くその差は有意傾向( $.05 < p < .10$ )であった。

#### IV. 考察

##### 1. 保育者は保護者の何が気になるのか

80%近くの保育者が「気になる保護者」がいると回答している。これは、保育者が子どもだけでなく保護者に関心を寄せていることの表れであるといえよう。

「気になる保護者」の特徴については、「保育者及び園とのかかわりにおける特徴」と「子どもとのかかわりにおける特徴」の項目において「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が比較的高く、「保護者自身の特徴」の項目においては全般的に低かった。このことから、保育者は、保護者自身に対してより、「子どもとのかかわりが不器用である」「子どもを怒鳴ったり激しく叱ったりする」などにみられるような保護者の養育態度や、「こちらの意図が伝わりにくい」「行事予定や提出物などを把握していない」「おたよりや連絡帳を読んでいない」

といった園生活における直接的なかかわりを通して保護者に対して気になると判断していると考えられる。日常の保育において保育者が保護者と接するのは送迎時や連絡帳を通してであり、その他に保護者会や行事等の機会があるが時間的にはそう長くはない。そのため「保護者自身の特徴」について気になる機会自体が少ないものと推察される。

自由記述回答の結果から「親としての自覚がない、マナーが悪い」「過保護・過干渉」「子どもや子育てに無関心」「子育てに自信がない」「しつけ、教育の仕方がわからない」「園に保育を頼りがち」といった気になる特徴が挙げられたが、これらは保護者の養育姿勢に対して保育者が「気になる特徴」といえよう。保護者自身の特徴として挙げられたのは「コミュニケーションがとりにくい」のみであった。保育者は、「子どもと同じような姿の保護者が多い」「送迎の際もスマートフォンを常に操作している」「忘れ物が多い」といった内容を、「親としての自覚がない、マナーが悪い」という保護者の養育態度として捉え「気になる特徴」として回答しており、保護者自身の社会性や生活スキルの低さとして捉えてはいないと考えられる。

本調査において「保護者自身の特徴」として掲出した項目は、知的能力、社会性、コミュニケーションなどにおける困難や家庭不和の可能性を示すものでありこれらの特徴を持つ保護者は子育てや社会生活において問題を抱える場合も少なくないと推察される。星野（2011）は、大人の発達障害について、ADHDやアスペルガー症候群などは、子どもの頃からその兆候はみられるはずであるが気づかれにくく、軽度であるがゆえに見過ごされること、そして、「発達障害」という事実を知らないままに、親や教師から叱責を受け続けた発達障害の人は思春期や青年期になると漠然とした社会への不適応感を抱き、劣等感や疎外感に苛まれ、さまざまな合併症を発生してはじめて受診する人が多いと述べている<sup>16)</sup>。杉山（2013）は、自閉症スペクトラムの子どもの親の側に、診断基準に満たない軽度の自閉症スペクトラムがしばしば認められること、子どもの側に社会性の発達の遅れがあっても、親の側に自閉症スペクトラム傾向があっても、ともに子どもの側に社会的な発達、何よりもアタッチメント（愛着）形成に遅れが生じ、これが子ども虐待の高リスクになることを報告している<sup>17)</sup>。これらのことから、保育者が保護者自身の特徴に気づくことが、保護者を注意深く見守り適切な支援を考えるきっかけとなり、それが子ども家庭支援の第一歩につながると考えられる。

「20. 保育料、雑費などの未納がある」の項目は、「とてもあてはまる」「あてはまる」の回答比率が30%に満たなかったが、経済的困窮を示す兆候でもあり、保護者支援において注意を払う必要があると思われる。経済的困窮は家庭生活に大きな影響を与える要因の一つであり、阿部（2014）は、欧米諸国のデータから、子ども期の貧困の経験が、子どもが成人となってからのさまざまな状況（学歴、雇用状況、収入、犯罪歴など）に密接に関係していることを示し<sup>18)</sup>、親の就労支援や生活支援など様々な機関と連携した家庭支援の必要性を報告している。現代の貧困は外部からは見えにくいもの<sup>19)</sup>であることをふまえ、保育者は保護者を見守る必要があると思われる。

「気になる子を育てている」の項目は、過半数の保育者が「どちらともいえない」「あてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答している。「気になる子ども」を育てていることがすなわち「気になる保護者」の特徴にはならないとの回答は、保育者が、保護者を子どもと一体化して判断していないことの表れであるとも考えられる。しかし、「気になる子ども」を育てている状況にある保護者は、子育ての成功体験が少なく自信を喪失していたり、子どもに対して育て難さを感じたりしている可能性が高い。山野（2008）は、児童虐待発生のメカニズムの一つとして子どもに病気や発達面等の障害がある場合、あるいは、よく泣いたり、食べなかったりするなどのいわゆる「手のかかる子」「育てにくい子」の場合を挙げている<sup>20)</sup>。杉山（2013）も、「あいち小児センター」を受診した子ども虐待の症例1,110件のデータにおいて、実に3割近くの被虐待児が自閉症スペクトラムを基盤にしていること、これらの子どものうち9割までが知的な障害を伴わない高機能群であることを報告している<sup>21)</sup>。これらのことから、「気になる子ども」の保護者に対しては、その心労や疲労を推し量ること、保護者の不安や葛藤などを受け止めることなど特別な配慮や丁寧な支援が必要であると考えられる。

## 2. 気になる保護者への具体的支援

保育者は、高い比率で「普段からコミュニケーションを心がける」「保護者の話をよく聞く」「子どもの様子を詳しく伝えるようにする」といった支援を行っていることが示された。日常的なコミュニケーションを積み重ねること、保護者の話を聞くこと、子どもの様子を伝えることは、保護者との信頼関係を構築するものである。また、このような支援を行う過程での保護者とのかかわりから、保育者は気に

なる保護者の特徴として「こちらの意図が伝わりにくい」と感じるのではないかと考えられる。

自由記述回答からは、保育者が行っている支援として保護者に対する視覚支援や、会話で伝わらない場合には書いて伝えるといった、保護者一人ひとりの特徴に応じた支援が行われていることが明らかとなった。このような支援が一部の保育者だけでなく園全体として行われるようになるような園内研修等の検討も必要であると思われる。

次に、保育者が行っている支援の保育歴による差異については、保育歴が長い保育者は園長や主任の役職に就いていることが影響していると考えられる。「個別に話をする機会をもつ」「支援の方策を他の専門機関などに相談する」などの支援は主任や園長が主になり実現する機会が多いからである。「気になる家庭の経過を記録にとる」の支援については行っているとの回答が少なかったが、記録に残し読み返すことで、何が気になるのか、どのような支援が必要なのかの見通しが立つものと思われる。本調査では保育歴が長い保育者に有意に多い傾向が示されたが、これは保育歴の長短にかかわらずどの保育者も行うことが望ましい支援であるといえよう。

## V. 今後の課題

本調査の課題として、調査票の回答方法の整理が挙げられる。26項目を5件法で回答する設問と選択肢を掲出し複数回答可とした設問を取り混ぜたことから、回答方法を混同し必要な回答を得られなかった回答票が複数枚みられた。今後、調査票の項目や設問の工夫と、回答しやすい調査用紙作成等の工夫が必要である。そして、今回は、保育歴の長短による分析に留まったが、クラス担任や園長、主任など役職により保育者の意識や支援に差異がみられるのかどうか、さらに分析を重ねたい。また、保護者と接する時間や経験により「気になる保護者」への意識や支援に差異がみられるのかどうかを、子どもと保護者への支援を行う地域子育て支援拠点の支援者と保育所・幼稚園の保育者の比較により検討していきたい。

- 1) 厚生省 (1999) 保育所保育指針. フレーベル館. 71
- 2) 厚生労働省 (2008) 保育所保育指針. フレーベル館. 4
- 3) 同上書. 31-33
- 4) 文部省 (1999) 幼稚園教育要領. チャイルド本社. 14
- 5) 文部科学省 (2008) 幼稚園教育要領. フレーベル館. 5

- 6) 渡辺顕一郎 (2009) 子ども家庭福祉の基本と実践－子育て支援・障害児支援・虐待予防を中心に. 金子書房. 6
- 7) 鑑 さやか・千葉千恵美 (2005) 社会福祉実践における保育士の役割と課題－子育てに関する相談援助内容の多様化から－. 東北文化学園大学保健福祉学研究第4号. 27-38
- 8) 白石京子 (2014) 子どもの育ちと保護者支援－保育相談からみえる子どもの発達支援と包括的支援－. 文教大学生生活科学研究 Vol.36. 53-64
- 9) 久保山茂樹・斎藤由美子・西牧謙吾・當島茂登・藤井茂樹・滝川国芳 (2009) 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査－幼稚園・保育所への機関支援で踏まえるべき視点の提言－. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要第36号. 56
- 10) 同上書. 55-76
- 11) 林 優子・土田玲子・引野里絵・玉井ふみ・堀江真由美・清水ミシェルアイズマン・松田紀子・菊森美佐・内田千枝・上久保 亜紀 (2010) 尾道市の子育て地域支援システム構築にむけての支援者の意識調査. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌 10 (1). 55-66
- 12) 木曾陽子 (2014) 保育における発達障害の傾向がある子どもとその保護者への支援の実態. 大阪府立大学 社会問題研究第63号. 69-82
- 13) 渡辺顕一郎・田中尚樹 (2014) 発達障害児に対する「気になる段階」からの支援－就学前施設における対応困難な実態と対応策の検討－. 日本福祉大学子ども発達論集 第6号 31-40
- 14) 星野仁彦 (2011) 「空気が読めない」という病－大人の発達障害の真実. ベスト新書. 86-97
- 15) 司馬理英子 (2013) シーン別アスペルガー会話メソッド. 主婦の友インフォス情報社. 3-5
- 16) 星野仁彦 (2011) 前掲書. 139-140
- 17) 杉山登志郎 (2013) 講座 子ども虐待への新たなケア. 学研. 10
- 18) 阿部 彩 (2014) 子どもの貧困Ⅱ－解決策を考える－. 岩波新書. 8-9
- 19) 同上書. 214
- 20) 山野則子 (2008) 第3章虐待. 山縣文治 (編) 子どもと家族のヘルスケア－元気なところからだを育む－. ぎょうせい. 190
- 21) 杉山登志郎 (2013) 前掲書. 9-10

## 謝辞

本調査に協力してくださった保育所・幼稚園の皆様と、調査依頼にご快諾してくださった自治体担当課の皆様と心より感謝申し上げます。

(長野県短期大学 幼児教育学科)

(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7

TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026)

(平成26年10月1日受付、平成26年11月28日受理)